

名もなき神々

浅草 豊島

戦争中、安南の農村に關係したものを
綴叙したことがあるが、その時、氣の付
いたことはそこで記られている神様が実
にブラエティに寓んでいること、ことに
いかがわしい由緒の神様が数多くあられ
ることだった。例えば泥濘の神様や肥後
みの神様までいて、その祭礼にはそれぞ
れ祭神の「徳」を擧げて、そのしくさを
してみせると書いてある。その後、浙江
省の寧波附近の地誌を窺っていたところ、
同じような資料にぶつかって驚いた。尤
も流石に礼節の固だけあって、足塚や肥
後みまでは出てこなかったように記述し
ているが、それでも神様の「徳類」は秀
しい教に上る。文昌・閼帝、歳々といっ
たホニエラーの神様もいらつしやるが、
それよりずっと多いのはその村とかその
地方とかでしか通用しないような地方的
な神様。いわば「名もなき神々」である。
所が日本の場合、神様の「種類」は至
つて少い。ことに有名な神様になると何
処へ行ってもお目にかゝる反面、ローカ

ル・ゴットの類は大変に少い。そこで私は
次のような決定をたてていたのであるが、
それは神社整理以前に於いてはもつといろ
いろは神様、地方的な神様が占められたので
はないかということである。い、かえれば、
祭社を遷徙するために他村神のものに乘換
えたり、今まで合祀無慮のものが本殿に納
まつたりしたのはないか。或いは少くも
も地方神は着しく姿を消したのではないか。
さてこれを究るには、どうしても最新前の
資料が要ることになる。私が本文を筆した
のも実はこれについての資料の御教示をえ
たいためであるが、しかしヒントはこちらら
で、タネはそちらというのも虫のいい話な
ので、最近、筑豊炭田地帯でえた一二の文
献を紹介しておきたいと思つ。江戸末期の
逸本で、肥後の一巻といえよう。

屋 水 村

同村天神七所に阿り七天神という、石祠
はかりにて神林はなし、里民の云、元和年
間島原御陣の時、当村より公儀に行しもの
皆々事故なく帰りけるを村中より留して其
荷ひし碓を枕ひ奉るといふ。
此九州は天神様の本郷であるが、この天神
様は管公ではないようである。

下 瀬 村

一庭(土)神王子宮……今の屋所に移し
奉る時は口月十九日といふ、御神体の瓦
瓦か、えて移しける由、今も九月十九日
の神事に村人衆で神版の尻をかかへて拜
殿にて敷る、敷に志りか、へ宮といふ。
これはいざ、か蚤が悪いが、別に珍らし
いこともあるまい。

柿 原 村

原といふ所に大なる石窟あり、……村中
に人寄はと阿る時、若狭を前日に此石窟
へ籠り置て、雨朝到りみれば何人前とい
ひしこしく動へて出して有ける。至極大
切に取扱ひ又持行て葬し置けハ石窟中に
取入る……

この場合、御神体は詳でない。しかしこ
の逸本の筆者は「註」に「塚に販遠の界、
大井川の川上島田の岩より一里半許、世の
窟」といふ村に稱茂し森中に禰御前という小
祠有、此社へ願ひて腰被着口口るといふ。」
と記してあり、恐らくここの神様はまだ
まだいたことであろうし、今もいると思わ
れる。

(九州大学)